

論文

沖縄県の言語聴覚士の「方言問題」

Language and communication problems concerning dialects on medical sites
– Based on our questionnaire survey for Speech-language-hearing therapists in Okinawa –

岩城 裕之 (高知大学教育学部)

IWAKI Hiroyuki

Faculty of Education, Kochi University

ABSTRACT

According to the questionnaire survey of Speech-language-hearing therapists (STs) in Okinawa, following three points became clear.

- 1) When STs did test of aphasia (SLTA), 44% of ST met patients who answered in their dialect. On the other hand, When STs did test of dementia (HDS-R), 72% of ST met patients who answered in their dialect.
- 2) STs require a “dialect vocabulary list”. Particularly, “feelings”, “names of the body parts”, “greetings”, “honorific”, “names of the articles” and “place names” are required by STs.
- 3) It is necessary to make a list of dialect vocabulary for SLTA nationwide And, it is necessary to prepare for the vocabulary list of “names of vegetables” (for HDS-R) in Okinawa.
- 4) Information of the pronunciation is necessary for “dialect vocabulary list”.

I. 問題の所在

今村・岩城等(2013)では、医師や看護師と地域住民とのコミュニケーションにおいて方言理解が必要なケースがあること、さらにこれらの問題は大規模災害時に先鋭化した形で問題を引き起こすことなどが明らかにされた。また、岩城・今村等(2013)では、その解決のための「方言支援ツール」の開発も行ってきた。

他方、医師や看護師以外の医療スタッフと患者とのコミュニケーションにおいても同様のケースが考えられるものの、この「方言問題」の実態調査とその解決の方策を考えることは残された問題であった。

そこで本論文では、言語聴覚士(以下、ST)を取り上げる。主にことばを扱う職種であり、方言の問題も大きいと考えられるからである。

具体的には標準語と特徴を大きく異にする方言を持つ沖縄県を対象とし、沖縄のSTが患者の方言をめぐるような困難を抱えているのかということ、また、方言情報へのニーズがあるとすれば、それはどのようなものであるのかを明らかにする。

II. 研究の方法

1 取り上げる場面

言語聴覚士の業務場面を3つに分け、予想される患者の方言使用について次のように整理した。

①検査場面：標準失語症検査(SLTA)、認知症検査などを実施する際、回答が方言で現れるケース。例えば、認知症検査で「野菜の名前を挙げてください」という質問に対し、野菜の名前が方言で回答されるケース。

②訓練場面：発音の練習、もの名前を思い出すなどの訓練場面。名前を思い出す場合、方言名で思い出すこともあると思われる。また、嚙下の訓練や体操などでの声かけも方言を交えるなど、地域にあったコミュニケーションが必要だと思われる。

③説明・聞き取り場面：患者および家族などと、症状や今後の方針を説明したり話しあったりする場面。検査と区別しにくい面もあるが、患者の背景を知るための聞き取りなど。様々な意味分野で方言が出現する可能性があるケース。

本調査では、主に①について調査を行った。

検査場面で患者の方言理解を誤ると、症状の把握に問題が起こると考えられる。患者の状態の評価は、言語聴覚士の業務で最も重要な部分の一つであると考えられているからである。

2 沖縄アンケート調査の概要

実施期間 2015年2月

実施方法 沖縄県言語聴覚士会の研修会で実施(那覇市)

回答者 沖縄県言語聴覚士会に所属するST 25名(沖縄本島の医療機関に勤務)

沖縄県言語聴覚士会は会員数約200名のため、回答者は沖縄県STの13%に相当する。年齢平均は29.3歳(20代15名、30代7名、40代以上2名、無記入1名)、ST経験年数は6.1年、うち沖縄5.9年であった。経験年数の中央値は5年、最頻値2年で、歴史的に新しい職種であり、職員も若いことがわかる。このことは、古い世代の伝統的な方言理解に困難を感じる可能性が高いことを予想させる。

III. 結果

1 標準失語症検査(SLTA)場面での方言

SLTA(Standard Language Test of Aphasia)は日本における代表的な失語症検査である。「聴く」「話す」「読む」「書く」「計算」の項目について評価することができ、26項目の検査から構成される。例えば、絵カードを見てそれが何であるか答える、マンガを見て状況を説明する、STが提示した語が描かれている絵カードを選ぶ、などの検査である。

この検査実施時に方言回答があるかどうかを尋ねた結果が図1である。方言での回答があると答えたのは、44%のSTであった。

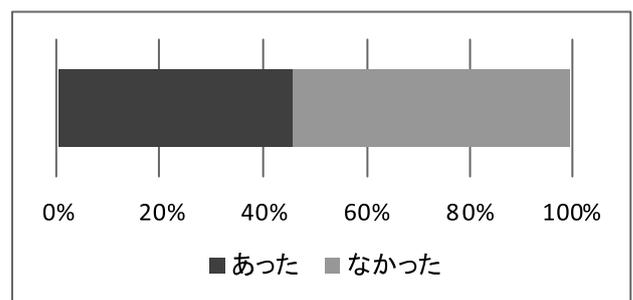


図1 SLTAでの方言回答の有無

さらに、「(SLTAに方言回答がある場合)それはどのような方言ですか?」については、以下の回答が得られた。

猫 マヤー マヤ
 犬 イン
 眼鏡 ガンチョー

家 ヤー

俚言がある項目の場合、俚言で回答されることがあるとわかる。

2 認知症検査（長谷川式簡易知能評価スケール）での方言

認知症検査の「野菜語想起」において方言回答が出現するかどうかを尋ねた回答が図2である。

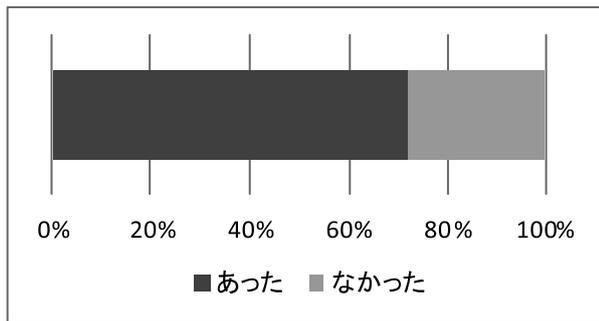


図2 長谷川式簡易知能評価スケール（野菜語想起）での方言回答の有無

72%のSTが患者の方言回答があると回答しており、SLTAに比べて方言回答の出現が多いことがわかる。野菜の名称に関しては方言での回答が出やすいということである。その理由として、島野菜に代表されるような特徴的な野菜があること、また、俚言は日常語に多いことが考えられる。さらに、SLTAの対象となる失語の患者は認知症患者と異なり、発言が少ない。そのため、方言の出現が少なくなりがちであることも理由として考えられる。

3 検査場面以外での方言使用

「検査場面以外で、方言で困ったことがあったかどうか、その場合どのようなことだったか」という自由記述項目によって、調査場面以外での患者の方言使用の状況も調査した。

その結果、回答者の約半数である13名が困った経験があると答えた。

以下、具体的な回答を列挙する。

- フリートークが出来なくて困った。方言がわかる方とは会話できていた。
- 長文での会話となると解らない場合があります
- 認知症の患者様で、元々方言を中心に使用して会話する方がいました。病棟・リハスタッフすべての方に方言

で話しかけ、他県出身のスタッフはコミュニケーションを図るのに困っていました。

●絵カードを使用した呼称課題。バナナ→バナサイ、茶碗→マカイなど

●日常会話や症状を訴えるときに解らなくて困った

●自宅介護の方が食思低下から入院。日常生活ではほぼ方言。入院中に認知機能低下もあり、不穏な状態が続いてしまった。本人も方言（地域性も強く）であり、コミュニケーションがうまくいかなかった。

これらの回答から、沖縄独特の方言の存在や沖縄県以外のSTの困難など、検査時だけでなく様々な会話の場面で方言がわからなかったことがあることが確認できた。さらに、

- ジャーゴンと方言の区別がつかない場合がある。家族かその方言がわかる方に確認した
- 構音検査での評価時、「が」→「ぐわ」になるため歪みと評価してしまった

のように、検査結果を左右しかねない場合もあることの指摘もあった。

正しい診断を行うことは優先事項であろう。そこで、検査場面で出現すると思われる方言を優先し、「方言の手引き」を整備する必要があると考えられる。

IV. 考察 — 沖縄のSTが必要とする方言情報

1 検査場面でのニーズ

IIIで明らかになったとおり、検査場面では認知症検査での「野菜語想起」の優先度が高い。また、SLTAでも俚言の出現があることから、一定のニーズがあると考えられた。

また正確な診断という点からも、検査場面は重要であると考えられる。

2 検査場面以外のニーズ

検査場面以外に、「どのような方言を知っておくと良いか」を尋ねた。調査は意味分野を挙げて選択してもらう選択式と、具体的な例を思い出して記述してもらう自由記述式の2種を実施した。

まず、選択式の調査では、これまで医師・看護師を対象とした研究の結果導き出された意味分野をあげ、必要だと思うものを複数選択する形式とした。診療場面で医師や看護師が必要な分野である。具体的には、「応答」「症状・感覚」「頻度」「程度」「動作」「心情」「身体部位名称」であるが、それに加え、調査対象がSTであることから「発音」を加えた。

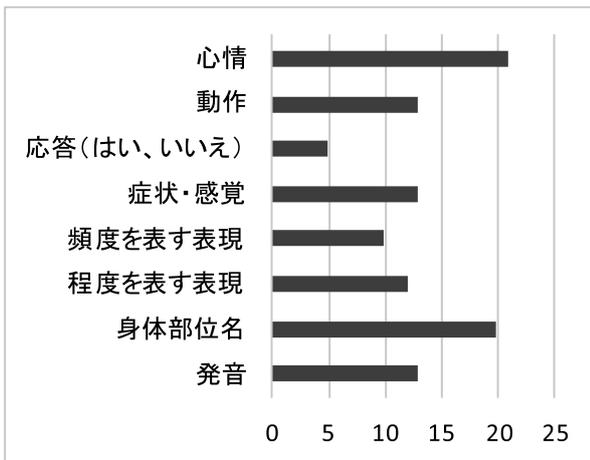


図3 方言情報が必要な分野（選択式）

他方、自由記述式の調査では「方言の必要性はあるか」「どのような分野の方言を知っておくと良いか」「沖縄でSTをやっていく際、方言について知っておくと良いことはどんなことか」を尋ねた。その結果を示す。

【方言の必要性】

- 簡単な方言は知っておくべき。指示理解の難しい方に、方言(単語)での指示入力が可能となることがあります
- 日常会話に出てくる方言
- 方言で言っていることを理解できないとコミュニケーションが取りづらい場合がある
- 方言を知らないとコミュニケーションが取れないときがある。錯語なのか、ジャーゴンなのか、方言なのか、など

【必要な分野】

- 最低限、身体の部分や身のまわりの高頻度語は知っておいた方が良いと思われます
- 挨拶、単語、感情を表す言葉
- 物の名前(野菜や日用品)、感覚の表現(痛い、寒い、暑いなど)
- 食材や行事に関しては少し「フーチバー」とか「ウンケー」とか
- 物品名や習慣的に使用されている日用品、日常的なフレーズなど。ばんそうこう→リバテープ、歯磨き粉→コールゲート、画鋸→オシピン
- 挨拶、気分を尋ねる、地名、地域、血縁関係
- 地名。平良→ピサラなど
- (複数名が記述していた) 方言の敬語の使い方、あいさつ
- 日常会話で簡単な指示
- 嚙下で注意を促す場合 ゆくぬでいーしないようにしっかりと起きててください

方言が必要な分野として、図3からは「心情」や「身体部位」が候補にのぼる。さらに自由記述では、さらに次のような分野があがっていた。

- ①関係を構築するための「挨拶」「敬語」
- ②患者と家族等、患者の環境を把握するための「地名・地域」「血縁関係(親族語彙)」
- ③患者の日常生活に関わるものとして「日用品」「食材」「行事」
- ④選択肢調査と重なる部分として「感情」「感覚」
- ⑤その他、医療場面等での「日常的なフレーズ」「簡単な指示」

これらをIIで整理した場面に位置づけると、②や③については「説明・聞き取り場面」、③や⑤は「訓練場面」と主に関係していると考えられる。

STに対して発信する「方言の手引き」は、これらすべての分野をカバーする必要がある。しかし、一度にこれらを整備することは難しい。そこで、段階的に「方言の手引き」を整備することが現実的であり、一定のニーズがあり、STの仕事に重要な位置を占める検査場面の「方言の手引き」を準備することを優先させることが望ましいであろう。

3 SLTA か認知症検査か

認知症検査の野菜語想起への方言データベースのニーズは高かったものの、SLTAと異なり、項目が限定されていないという困難がある。

一方、SLTAでは検査で用いられる語が限定されており、「方言の手引き」が作りやすい環境にある。「鉄橋」のように沖縄では見られないものが検査項目に入っている面もあるが、多くが日常生活で見かける基礎的な項目である。

データの集めやすさという点ではSLTA、緊急度という点では野菜語である。したがって、全国規模の整備はSLTA、沖縄に限っては認知症検査であろう。

4 SLTAに対応した方言データベースの有効場面と内容

ではSLTAに対応した「方言の手引き」がある場合、どのような場面(患者)で役立つのであろうか。

具体的には、「方言の手引き」(アンケート中では方言リストと表現)が沖縄のSTが現在の勤務地で役に立つか、あるいは沖縄以外へ異動したとき、また、沖縄以外の患者が来院したときの3つの場面で、それぞれ役に立つかどうかを尋ねた。その結果を図4として示す。

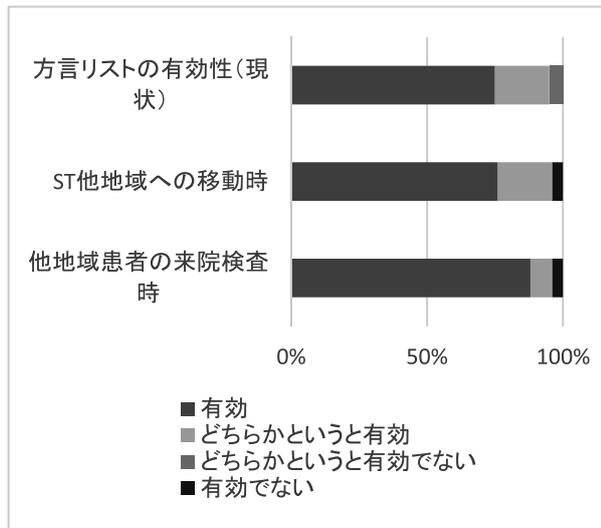


図4 「方言の手引き」の有効場面

SLTAの「方言の手引き」の場合、現在の勤務地で沖縄の患者に対応する時よりも、現在の勤務地とは異なる地域（沖縄以外）の患者が来たときに最も使えると思われる。すなわち、SLTAの項目について、沖縄だけでなく全国の方言でどのように回答されるのかを示したデータベースがあれば、沖縄のSTはそれを利用して沖縄以外の地域の患者の検査に役立てることができるということである。

次に示す図5は、データの提示方法の結果である。

STは音声を取扱う職種であるため、文字情報と音声情報の両方が必要であることも確認できる。

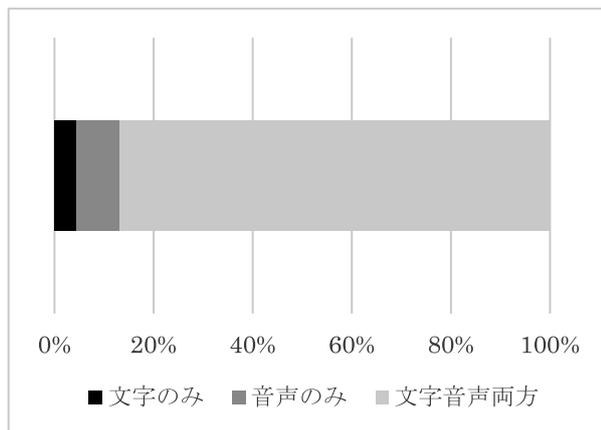


図5 「方言の手引き」の情報（音声か文字か）

V. まとめと今後の課題

沖縄のSTへの調査から、次のことが明らかになった。

- ① SLTAや認知症検査の野菜語呼称の際、患者の方言回答があること。また、SLTAよりも認知症検査の際に方言回答が出現しやすい。
- ② 方言の情報が必要な意味分野は多岐にわたって

る。特に心情を表す語彙と身体部位の名前、挨拶、敬語、日常用品の名前、地名は必要とされている。

- ③ 検査場面では沖縄では認知症検査の野菜呼称への対応が必要である。一方、全国規模でSLTAの検査項目の方言リストを作っておくと便利である。
- ④ 「方言の手引き」には音声と文字の両方の情報が必要である。

今後は、他地域のSTの状況を調査すると同時に、STのための「方言の手引き」の開発を急ぐ必要がある。

謝辞

沖縄調査にあたって、沖縄県言語聴覚士会事務局長の玉城亮氏の協力を得た。記して感謝申し上げます。

また、本研究はJSPS 科研費 24520519の助成を受けたものです。

なお、本調査実施後、STに向けた方言データベースおよび方言の手引きを公開している。

<http://ww4.tiki.ne.jp/~rockcat/>

より、閲覧が可能である。

文献

- 1 今村かほる・岩城裕之・武田拓・友定賢治・日高貢一郎, 2013, 東日本大震災災害派遣医療関係者を中心とした方言コミュニケーションの問題と効用, 日本方言研究会第97回研究発表会発表原稿集
- 2 岩城裕之・今村かほる・武田拓・友定賢治・日高貢一郎, 2013, 災害時・減災のための方言支援ツールの開発, 日本方言研究会第97回研究発表会発表原稿集